日清戦争後における狭斜小説の調査と分析

―芸娼妓、私娼を描くことの評価をめぐって―

光石　亜由美*

要　旨

日清戦争後に流行した悲惨小説の流れの中で、一八九五〔明治二八〕年ごろから芸娼妓・私娼を描いた小説が頻出する。一八九六〔明治二九〕年の半ばには、それらを指す「狭斜小説」という名称が使用されはじめ、遊廓・花柳界・私娼窟を舞台に、芸娼妓・私娼を描くことの是非が論じられるようになる。本稿では、その経緯を、同時代評を中心に調査・分析した。

キーワード：狭斜小説、悲惨小説、芸娼妓

Key words: Kyosya-Novel, Hisan-Novel, Prostitute

一　はじめに　――「狭斜小説」とは

一-一　問題提起と調査範囲

「悲惨小説」あるいは「深刻小説」は、日清戦争後の一時期、流行した小説ジャンルであるが、その中に、花柳界、遊廓、私娼窟を舞台に、芸娼妓、もしくは私娼を描いた「狭斜小説」と呼ばれる一群がある。本稿では、同時代の雑誌や新聞の文芸記事から、狭斜小説に関するものを抽出し、分析する。

おそらく、芸娼妓、私娼を描くことが近代の文壇において、初めて問題化されたのは、この狭斜小説の流行した一八九五〔明治二八〕年～一八九六〔明治二九〕年ごろであると思われる。悲惨小説や狭斜小説の価値や是非を論じる同時代の文芸時評を調査することによって、芸娼妓が描かれている作品がどのように評価されているかを分析し、その評価の基準を導き出したい。

調査は、文芸雑誌・文芸同人誌・政論雑誌（綜合雑誌）・各新聞に掲載された同時代評（文芸時評）を採録した『文芸時評大系　明治篇』（ゆまに書房、二〇〇五年）を中心におこなった。『文芸時評大系』は主に時評欄のみを収集しているので、本欄・記事欄については、「早稲田文学」「めさまし草」「帝国文学」「青年文」「文学界」「新声」、そして新聞は「読売新聞」「朝日新聞」を調査した。『文芸時評大系』第

平成27年９月29日受理　*文学研究科国文学専攻　准教授

一巻から第四巻に採録対象となっている雑誌・新聞は、雑誌四〇誌、新聞三紙である。その中から、狭斜小説が流行した一八九五〔明治二八〕年～一八九六〔明治二九〕年を中心に比較的多く採録されている雑誌六誌と新聞二紙を調査対象とした。調査対象期間は、『文芸時評大系』第一巻の一八八六〔明治一九〕年から、第四巻の一九〇〇〔明治三三〕年までとした。下限を一九九〇〔明治三三〕年に定めたのは、このころには、悲惨小説の反動として家庭小説が登場し、悲惨小説の流行もひと段落ついたというのが理由である。

なお、引用文は出来る限り原文に従ったが、旧漢字は新漢字に改め、ルビは必要と思われるところのみ付した。

一－二　「狭斜小説」とは

悲惨小説は、文学事典では「死、貧窮、病苦など、人生の悲惨、深刻な暗黒面の描写に重点をおいた小説をいうが、近代文学史ではとくに日清戦争後の数年間に流行したこの種の小説群をさす」（『日本近代文学大事典』）と説明されている。日清戦争後、不景気・増税、都市部への人口流入による、貧困問題などの社会問題に目を向けた新しい文学として注目されたのが悲惨小説である。また、「文芸倶楽部」「太陽」「帝国文学」「青年文」「文庫」（一八九五〔明治二八〕年）、「新文壇」「めさまし草」「新声」「世界之日本」「新小説（再興）」「江湖文学」（一八九六〔明治二九〕年創刊）などの文芸雑誌、総合雑誌が創刊され、小説執筆の場が増えたことも、悲惨小説が流行した背景である。しかし、悲惨小説の評価としては、日清戦争後の社会矛盾を追及する反面、人々の興味を一時期、引いただけで、素材主義に終わってしまったと評されることが多い。

日清戦争後の社会不安を反映した悲惨小説では、必然的に小説の主人公になるのは、貧民、被差別民、犯罪者、身体的・精神的障がい者、芸娼妓・私娼などが多い。その中で、芸娼妓や私娼を描いたものが「狭斜小説」と呼ばれた。「狭斜」とは、遊里、色町のことである。中国・長安の遊里のあった道幅の狭い町の名前から由来する。

今のところの確認できた「狭斜小説」の最初の用例は、一八九六〔明治二九〕年八月一五日「早稲田文学」の「今後の作者たるもの狭斜の小版図に泥みむの僻を去り、広く社会の全面に材を求めよ、特に狭斜小説流行の弊は往々にして意志弱き小作家をして遊蕩に陥らしめ、貧困の余、破倫の人とならしむるの縁となることあり、」（無署名「文学界　小説と娼婦（彙報）」、傍線部引用者、以下同じ）であり、また、同記事には、「元禄文学が世間にもてはやされたるも、娼婦が小説の主なる題目となれる一誘因ならん、西鶴、近松、八文字屋等の作の勝れたる者は殆ど狭斜文学の名にて総括し得るの趣あり」と、「狭斜文学」という文字も見えている。

「狭斜小説」という用語は一八九六〔明治二九〕年八月ごろに出現したと仮定できるが、悲惨小説の流行にともない、芸娼妓等を描いた小説が数多く書かれるようなるのは、その前年の一八九五〔明治二八〕年末以降の現象である。例えば、次の記事は、悲惨小説の中でとりわ

け狭斜小説が流行したことを伝えている。

・「昨年の末（＝明治二八年）より今年へかけて名高き作といへば、殆ど娼婦に関する材を採れるものならざるなく、又小説界の大体より、奈何なる主人公を用ひたるが尤も多きかと問へば、是れ亦娼婦若しくは之れに関係ある者を描けるが多数を占むるが如し」（無署名「文学界　小説と娼婦（彙報）」、明治二九年八月一五日）

・「狭斜小説流行の兆ある昨今、早稲田文学は男女の情交と狭斜の恋に就て左の如くいへり」（「男女の情交と狭斜の恋（評論）」国民之友、一八九六〔明治二九〕年八月二九日）

・「文界に在ては、二十八年来漸く新作家の出づるありて、小説界に生面を開かんとして、所謂悲惨小説なるものが行はれ、狭斜の境を写すこと行はれ、一時の傾向変せんとするの徴ありしが」（嶺雲「明治二九年の文壇」青年文、明治三〇年一月一〇日）

一八九五〔明治二八〕年九月に樋口一葉「にごりえ」（文芸倶楽部）が発表され、その後、江見水蔭「泥水清水」（文芸倶楽部、明治二九年四月）、広津柳浪「今戸心中」（文芸倶楽部、明治二九年七月）など、狭斜の巷を描いた作品が続出したことを指していると思われる。

そして、「（明治二九年）八月に到りて小説界の機運再び鬱勃として動かんとする徴候著しくなり、是れより月を逐ひて新旧作家共に続々と新作又は旧著を公にしき、狭斜小説流行云々の論問題となり、再び批評壇に論理の傾向を生じ」（「文学界　二十九年の文学界（彙報）」早稲田文学、明治三〇年一月三日）と、明治二九年半ばからは、芸娼妓を描いた「狭斜小説の流行云々」、狭斜小説の是非を論じる論が出てくる。こうした論議の中、「狭斜小説」「狭斜文学」というジャンルが形成されたと考えられる。

一八九六〔明治二九〕年半ば以降、狭斜小説の評価、芸娼妓を描くことの可否が、どのように論じられたかを検討する前に、比較として、日清戦争以前、芸娼妓を描いた作品はどのように評価されていたのかをまず見てゆきたい。

二　日清戦争以前の状況（明治一九～二七年）

この時期は近代文学そのものが未成熟で、文芸雑誌も少ないという制約があるが、狭斜小説の流行以前に、芸娼妓が描かれている代表作で、批評が多く寄せられているのは、春のやおぼろ（坪内逍遥）「当世書生気質」（晩青堂、明治一八年六月～一九年一月）、尾崎紅葉「伽羅枕」（読売新聞、明治二三年七～九月）、斎藤緑雨「油地獄」（国会、明治二四年五～六月）、同「かくれんぼ」（文学世界、明治二四年七月）、の四作品である。「伽羅枕」は京都島原遊廓・佐太夫であり、それ以外はすべて芸者がヒロインである。

二-一　肯定的評価と否定的評価

たとえば、尾崎紅葉「伽羅枕」については、「思ふに是れ紅葉山人の「一代女」ならむ。遊君佐太夫一生の歴史巧みに人情を曲盡したるの観あり。」（B・C・H「伽羅枕（紅葉山人著）」国民之友、明治二四年一一月一三日）、「紅葉が繡腸の中に磅礴たる一団の江戸気質の至醇が、合して『伽羅枕』に現はれては佐太夫となりて八文字を踏み、散じてはお艶、才蔵、紅梅の『三人妻』となりて妍を闘はし芳を競ひぬ。」（宙外生「美妙、紅葉、露伴の三作家を評す」早稲田文学、明治二七年七月二六日）とあるように、評価の基準に出されるのが、江戸の井原西鶴、近松門左衛門の遊廓文学の伝統である。佐太夫（お仙）は、江戸の旗本と京都祇園の芸妓との間に生まれ、早くから花街の生活を体験する。江戸に下った時、ただ一人の肉親（大名の奥方となっている異腹の姉）と身分の隔たりを感じ、吉原の花魁として全盛をきわめるというのが「伽羅枕」のあらすじである。江戸を舞台にしており、「是れ紅葉山人の「一代女」」と評されるのは、とくに、この時期、井原西鶴の再評価が行われ、尾崎紅葉も積極的に西鶴の作品を取り入れていたので、こうした評価が出るのは当然であるといえばそうであろう。小説そのものの評価というよりも、「通」や「粋」といった伝統的な文人の資質が問われる評価軸である。

また、坪内逍遥『小説神髄』（明治一八～一九年）によって提唱された写実主義という軸による評価もある。例えば、「貞之進が堕落の因縁果歴々として真に逼らんとす筆法写実なるが如くにして文（あや）あり艶あり」（「新刊　油地獄（時文評論）」早稲田文学、明治二四年一二月一五日）、「究竟するに紅葉は実を写す特有の天才より移つて佐太夫なる、或意味に於ての理想的伝記を画き出たるを以て」（透谷「伽羅枕及び新葉末集（第一）」女学雑誌、明治二五年三月）とあるように、江戸の花柳文学の定型化された人間像に対して、「油地獄」では片思いの芸妓が落籍され失意に沈む男の心情が、また「伽羅枕」では、佐太夫という花魁の心情が生き生きと描かれているところが「写実」的であると評価されている。

一方、「女学雑誌」のようにキリスト教的恋愛至上主義的主張の強い雑誌においては、西欧由来の近代的恋愛が神聖・高尚なものであると価値づけする批評の基準によって、近世的好色が色欲・淫欲として否定され、従って近世的価値観の範疇である芸娼妓も否定的に扱われる傾向にある。文芸的な価値基準よりも、倫理的、道徳的価値基準による芸娼妓＝「醜業婦」観、そして、「醜業婦」蔑視の言説もしばしば見受けられる。

二-二　キリスト教的恋愛神聖論における「醜業婦」蔑視

芸娼妓が「醜業婦」視されてゆくのは、一八七三〔明治六〕年の娼妓解放令からはじまる芸娼妓の取締り、また、一八九〇〔明治二三〕年前後から盛り上がり始めた、矯風会の廃娼運動によって広まって行くことについては、竹村民郎『廃娼運動』（中央公論社、一九八二年九月）、藤目ゆき『性の歴史学』（不二出版、一九九七年二月）らの研

究に詳しい。『性の歴史学』では、「婚姻外の性関係を罪悪視し、「純潔」でない女性に汚名をきせて排除する」という西欧的価値を背景に、「売春業者の公許を廃し犯罪化することで国家の体面をつくろうとともに、売春を罪悪とし娼婦を賤視する社会論理」（一〇三頁）を廃娼運動に見ている。例えば、「そも〳〵、娼妓芸妓の如き下賤卑劣なる女原（おんなばら）は、吾人もとより堂々として之を斥けずして可なり。」（巌本善治「理想之佳人（第三）宜しからぬ女原（社説）」女学雑誌、明治二一年四月二一日）のように、芸娼妓＝「下賤卑劣」というレッテル張りが行われる。恋愛神聖論からの狭斜小説批判は、このような、キリスト教の立場からの廃娼運動を背景にもつ芸娼妓批判と密接な関連があることは明らかだろう。

佐々木豊寿は、「文学を以て任ずる諸先生が此の醜業を営む者を筆誅することを為さずして却つて其楼の何々は其の娘にして孝心ものなり孝女なりなど、賞賛し或ハ柳橋新誌とか新橋雑誌なと、か云ふ四角張た六ケ敷文字にて書いた書物などに立派に醜業婦人共を褒賛さる、とは如何なる御心得にや」（「積年の習慣を破るべし（二）（寄書）」女学雑誌、明治二〇年二月一九日）と、文学者が「醜業婦」を描くことを批判しているが、文芸時評において、芸娼妓は「醜業婦」だから描くなという論調は、この時期、あまり見受けられない。

キリスト教的恋愛至上主義の喧伝者である北村透谷も尾崎紅葉「伽羅枕」については、元禄文学的な「遊廓的恋愛」は「好色的恋愛」であり、「獣性」であると批判しているが、佐太夫という娼妓の存在そのものを否定しているわけではない（「理想の女傑なる佐太夫」、「佐太夫は天晴粋の女王なり」「伽羅枕及び新葉末集（第二）」女学雑誌、明治二五年三月一九日）。斎藤緑雨「油地獄」に対しても、芸者に溺れる目賀田貞之進に「恋愛に対する弱点」を見ているのみで、芸娼妓そのものを否定してはいない（透谷「油地獄を読む（一）」女学雑誌、明治二五年四月三〇日）。

二-三　小まとめ：日清戦争以前に芸娼妓を描いた小説の評価基準

以上、日清戦争以前に芸娼妓を描いた小説の評価をまとめてみると、まず、「粋」「通」であるかどうかという遊客の資質が問われる近世的な価値観が評価軸である場合、また、新しい写実主義の基準に照らして人物が描写されているかどうかという評価軸が認められた。近世的好色＝色欲・淫欲／近代的恋愛＝神聖・高尚であるという恋愛至上主義を軸とした色恋と恋愛の階層化、そして、廃娼運動を背景とした芸娼妓＝醜業婦言説も背景として見受けられるが、文学作品において芸娼妓は「醜業婦」だから描くなという論調はあまり見受けられない。

これには、この時期の文学特有の理由があるだろう。例えば、坪内逍遥の「当世書生気質」では、「仮令（たとへ）其色にハ迷へバとて。其情にハ迷はざるべし」と、芸娼妓に対しては、色に迷っても、恋に迷うなと忠告している。

しかし、ヒロイン田の次は芸者である。佐伯順子が指摘するように、田の次は身持ちの堅い芸者として設定され、さらに、恋人・小町田と

も、幼な馴染み＝兄妹の関係と設定することによって、芸者＝「醜業婦」という見方を回避している。[1] こうしたことが起きるのは、当時、素人女性が小説のヒロインとして一般化していないという事情がある。

二葉亭四迷『平凡』（明治四〇年）では、小説を書くために「大に人生に触れて主観の修養」をするためには、「男女関係」を「実験」し、「若い女の研究」をしなければならないが、周囲の女性は、というと――「私の手の届く所だと、まず下宿屋のお神さんや下女になる。下宿屋のお神さんは大抵年を喰つてる。若いお神さんはうッかり触れると危険だ。剰す所は下女だが、下女ではどうも喰ひ足りない」ので、「どうも素人の面白い女に撞着って見たい。今なら直ぐ女学生という所だが、其時分は其様な者に容易に接近されなかつたから、私は非常に煩悶してゐた」とある。『平凡』の物語内時間は、明治一〇年代後半～二〇年代前半で、「女学雑誌」など啓蒙雑誌が「自由恋愛」を喧伝していたころなのだが、実際には恋愛相手となる素人女性＝女学生の絶対数が少なかった。江見水蔭も同様に、「今ほど男女間の交際が自由で無かつた。二十三年頃には、文士として必要な女子観察に、最も不便を感じてゐた。」（江見水蔭「紅葉の男所帯（明治二十三年の秋の頃）」『自己中心明治文壇史』博文館、一九二七〔昭和二〕年一〇月）と、恋愛の相手としての素人女性の不在を語っている。

自由恋愛の対象となり、小説のヒロインとなる素人女性、具体的には女学生が一般化するのは、明治三〇年代以降であり、それ以前において、小説のヒロインとなるのは芸者や娼妓が中心であり、彼女らの存在なくしては、物語が成立しないという事情がある。

三　日清戦争後の状況（明治二八～三三年）

では次に、日清戦争後の状況を見てみよう。冒頭で狭斜小説の流行を告げた「早稲田文学」の「文学界　小説と娼婦（彙報）」（明治二九年八月一五日）で紹介されている「狭斜小説」は以下の通りである。[2]

明治二八年：　山田美妙「阿千代」（文芸倶楽部、明治二八年四月）／小杉天外「改良若殿」（読売新聞、明治二八年四～五月）／樋口一葉「にごりえ」（文芸倶楽部、明治二八年九月）／山田美妙「鰻旦那」（文芸倶楽部、明治二八年一一月）／広津柳浪「亀さん」（『五調子』春陽堂刊、明治二八年一二月）

明治二九年：　藤本藤蔭「佼々」（文芸倶楽部、明治二九年一月）／斎藤緑雨「あまがへる」（太陽、明治二九年一月）／田山花袋「断流」（文芸倶楽部、明治二九年二月）／山田美妙「若白髪」（文芸倶楽部、明治二九年三月）／塚原渋柿園「密告」（太陽、明治二九年三月）／樋口一葉「たけくらべ」（文芸倶楽部、明治二九年四月）／江見水蔭「泥水清水」（文芸倶楽部、明治二九年四月）／広津柳浪「今戸心中」（文芸倶楽部、明治二九年七月）

なぜ、明治二八年になって、狭斜小説が流行したかについて、先に

狭斜小説の作品が列挙された「早稲田文学」の「文学界　小説と娼婦（彙報）」（明治二九年八月一五日）では次のように分析している。①日本において「男女の情交」の場が花柳界に限られること（「第一日本に於ける男女の情交の自然にして自由なる成立およびそが発展を狭斜以外にて見るは甚だ稀なり」）、②狭斜の恋愛は複雑であること（「第二狭斜の恋は他に比して複雑なり」）、③井原西鶴をはじめとする元禄文学の再評価（「第三元禄文学が世間にもてはやされたるも、娼婦が小説の主なる題目となれる一誘因ならん」）、④素人ヒロインの未成熟（「第四一時、女学生、小間使などの恋に題目を選みたれど、その単純と陳腐とに饜き、さればとて、小説と恋愛とは久しく離るゝこと能はざる甚深の関係あれば、そが領分を彼の方面に求めたるにも因るならんか」）、⑤樋口一葉「にごりえ」の評判（「第五「にごりえ」の名、都鄙に噴々たる為、これに動かされたる作家尠からぬも確に一因なるべく」）の五つを挙げている。

三－一　狭斜小説の否定的評価

では、狭斜小説についての議論が活発だった時期、これらの作品はどのように評価されていたのか。まず、狭斜小説の流行に対する否定的な立場から見てみたい。

狭斜小説が流行しはじめた明治二八年のころは、硯友社批判の文脈で尾崎紅葉や山田美妙の狭斜小説が批判されることがある。悲惨小説の書き手には硯友社の若手が多かった。泉鏡花、広津柳浪などの硯友社系若手や、反硯友社系の小説を引き上げるバーター的な機能として旧硯友社系の狭斜小説や、文士本人の不品行が否定的に論じられている例であり、狭斜小説そのものへの批判にはあたらない。

明治二九年の半ば以降、狭斜小説の議論が盛んになるころには、「小説の材を下賤なる社会に取るを難ずるものあり」（「小説の材（時文）」文学界、明治二九年九月三〇日）、「『今戸心中』狭斜の恋を描けるを以て、世の之を難ずるものあり」（「文士と理想」青年文、明治二九年一〇月五日）、「世の道徳論者の中には、早くも狭斜といふの故をもて之を斥けんとするものあり」（「文学界　近時小説の恋愛（彙報）」早稲田文学、明治二九年一一月一日）などのように、狭斜の巷、狭斜の恋を描くことそのものに対する道徳的、倫理的批判が出てきている。狭斜小説が扱う「下賤なる社会」「狭斜の恋」といった芸娼妓の世界を描くことへの批判である。

また、明治二八年半ば以降の狭斜小説の流行は、明治二九年になると飽和状態となる。早稲田文学「文学界　二十九年の文学界（彙報）」（早稲田文学、明治三〇年一月三日）はこの間の様子を次のように伝える。

「（明治二九年の）八月に到りて小説界の機運再び鬱勃として動かんとする徴候著しくなり、是れより月を逐ひて新旧作家共に続々と新作又は旧著を公にしき、狭斜小説流行云々の論問題となり、再び批評壇に論理の傾向を生じ、年末に至り、変調の恋を描くも

の多くなりて、之れを難ずる人もありき」

「変調の恋を描くもの」が、狭斜小説でしばしば描かれる心中事件か、近親相姦を描いた小栗風葉「寝白粉」（文芸倶楽部、明治二九年九月）か定かではないが、狭斜小説が扱うテーマに批判が集まっていることもうかがえる。

こうしたテーマを扱う狭斜小説そのものの「淫蕩」「淫猥」さが批判されることもある。例えば、浩々歌客「批評　戊戌文壇を迎ふ」（国民之友、明治三一年一月一〇日）では、文壇の傾向として「其隠微を抉出し醜汚を曝露するを以て得たりとするの風、靡然として一般の作家に行はれ、此傾向よりして凡人小説狭斜小説の名を付せらるゝ作品の続出」し、「不徳、醜汚、罪悪、隠微、猥褻、惨酷に亘るの結果、文学亡国論の唱道」となると、狭斜小説は、淫蕩文学、亡国文学とみなされる。こうした批判は、狭斜小説の代表作の多くが、芸者の写真を巻頭に載せて、花柳界の話題で読者の興味を引いた「文芸倶楽部」に掲載されたことも関係しているかもしれない。

そうして、狭斜小説の流行がピークを過ぎる明治三〇年以後あたりから、狭斜小説のテーマの範囲の狭さが指摘され、狭斜以外にも材を採ることが求められる。例えば、「一派の文士が狭斜小説に重きを置くを慨し、（中略）狭斜小説以外にも詩材の乏しからぬを教へ、政治社会に眼を転じて、其の家庭、その内幕を描写し来たれと叫ぶ者を、『早稲田文学』記者となす。這は詩材採択の区域を拡めて、在来の偏頗なる取材法を退くる上より、政治小説を奨励する説と見るべし。」（宙外「小説界の新生面（時文）」新小説、明治三一年一〇月五日）、「畢竟狭斜を材に採りたるものは情の発展する範囲に於いても小説の材料として限りあるべきもの」（無署名「心中皐月雨」六合雑誌、明治三一年一二月）のように、社会小説待望論の文脈で、狭斜小説の「詩材」の乏しさが指摘される。

これは、狭斜小説だけではなく、悲惨小説全体についてもテーマの偏狭さはしばしば指摘されるところである。時期的に家庭小説、社会小説が登場する時期と重なっていることが要因であろう。

三－二　狭斜小説の肯定的評価

日清戦争以前では、芸娼妓を描くことそのものへの批判はほとんど見受けられなかったが、狭斜小説がブームとなり、狭斜小説についての議論が高まる中、小説において芸娼妓を描くことの是非が問われるようになる。狭斜小説を「淫蕩文学」として批難してゆくもの立場はわかりやすいし、こうした批難は狭斜小説だけではなく、男女の恋愛、性愛を描いた小説に対して常にみられる批判である。

興味深いのは、狭斜小説を肯定的に批評、擁護しようとする側の論理展開である。

狭斜小説を肯定的に評価するものには、日清戦争以前から、芸娼妓を描いた小説に与えられる肯定的評価、「通」「粋」という視点からの評価も継続するが、この時期になって出てきた新しい評価軸をみてみ

る。

まず、狭斜小説は花柳界や遊廓、私娼窟を舞台として、芸娼妓、私娼などを描いているが、そこに表現されているのは、芸娼妓ではなく一個の「人間」であるという肯定の仕方である。例えば、山田美妙「鰻旦那」と樋口一葉「にごりえ」を評した「青年文」の記事では、次のように評価している。

「（お力が源七を捨てるのは）此実に濁江社会普通の常態なり。然れども『にごり江』のお力は決して是に盡きたるに非ず。此の酌女は決して酌女種族に非ずして、実に生命ある菊の井のお力なり、彼は決して「鋳型に入つた」酌女のタイプには非ず、彼は酌女なると同時に人間なり、種族（ジナス）、酌女なると共に、個人お力なり」（青年文記者「『鰻旦那』と『にごりえ』」青年文、明治二八年一二月一〇日）

「酌婦」という下層の娼婦を描きながらも、そこに「人間」「個人」を見るという、ある意味ヒューマニスティックな見方である。また、品川遊廓の娼妓の心中を描いた江見水蔭「泥水清水」についても、作者は娼妓である花鳥の「純潔の愛」を描き、遊里での心中事件も「二人が恋愛によりて惹起せる罪過」であると捉える。つまり、「泥水清水」は遊里を舞台としているが、その実は恋愛ドラマであるという解釈である。だから、「淫婦冶郎の徒を材料」としていても批判すべきもではなく、「如此人物と雖も、之をして活動せしめ、之をして生気あらしむると共に、其間に於て、人情の秘密を漏し、社会の機微を探るが如きに至りては、是実に小説の能事了れるもの」（「今日の恋愛小説（雑報）」帝国文学、明治三〇年四月一〇日）――つまり、「人情」「機微」が描かれれば、狭斜を材料にすることに問題はないと説明される。

狭斜という狭い世界を人間ドラマ、恋愛ドラマへと普遍化させて肯定するという発想の根本には、芸娼妓に対する「同情」的な見方が存在する。

先述したように廃娼論に代表される芸娼妓蔑視の流れに対して、狭斜小説は芸娼妓の「憐むべく哀むべき心根」「同情すべき点」を描きだしたことが積極的に評価される。これは狭斜小説の是非論が盛んになった明治二九年半ばの早い時期からすでに出ている。例えば、「狭斜の人情はひとしくこれ人間の情のみ、狭斜の悲惨もひとしくこれ世界の悲惨たるのみ。材は狭斜にありと雖も、描くは人生なり、世界なり。汚れたる狭斜の地に於ける清き情と涙とを描く、人をしてこれに同情せしむること多し」（「文士の品格」青年文、明治二九年八月一〇日）――狭斜小説は、「汚れたる狭斜の地に於ける清き情と涙」を描き、狭斜小説の効能とはそうした悲惨な境遇にある芸娼妓に「同情」を注ぐところにある。泉鏡花「辰巳巷談」評においても、「娼妓とて犬猫同様に扱はるゝものゝ、人知れざる苦心と人情とに心を寄せて、其の最後をまで写したるが、この一篇の眼目なるべし」（門外生「塵

影」読売新聞、明治三一年二月二八日）と芸妓への「同情」が、作品評価のプラスポイントとなっている。

これは犯罪、貧困など、社会的倫理的に「悪」とみなされるものを積極的に書いていった悲惨小説を擁護する発言にも通じる。例えば、島村抱月は「暗黒小説の功過」（読売新聞、明治三二年五月二二日）という記事において、「暗黒小説」＝悲惨小説は、「罪悪の中にも同情すべき点あることを発見して、従来小説家までが蛇蝎視したりし人生の一面に、新なる情味の光を被らせんとしたるもの、是れ実に暗黒小説より明治の文壇に貢献したる効果なり、一言以て蔽へば、同情の範囲を拡大したること暗黒小説の功にあらずや」と、「罪悪」への「同情」が悲惨小説の特質であるととらえている。

「賤業婦」とみなされていた芸娼妓、私娼に対して、狭斜小説は「憐れみ」「同情」のまなざしを向け、狭斜の恋を人間ドラマ、恋愛ドラマとして描き出すことに、狭斜小説の価値を見出してゆこうというのが、肯定的な評価のポイントであろう。しかし、単に芸娼妓に「憐れみ」「同情」を向けるだけではだめで、そこには作者（送り手）の「高尚」なる情操や、「技倆」が必要とされ、さらには読者（受け手）の読み取る力も重要であるとされる。

たとえば、「材料と技倆（雑報）」（帝国文学、明治二九年九月一〇日）においては、「近頃、我文壇に、題目の欠乏を頭痛に病むの文士あり、手腕の拙劣を掩はんが為めに、材を狭斜に採るの詩人ありと伝るものあり」と狭斜に材をとることの安易な流行を批判するが、「材を狭斜に採る」にあたっては、「汚穢なる材料も、清浄なる手に触れて、純潔と成り得べし」と、作者の技量によって、芸娼妓＝「賤業」という「材料」が「純潔」になると論じている。また、「文学界　近時小説の恋愛（彙報）」（早稲田文学、明治二九年一一月一日）では、近ごろ「一種常倫以外の恋愛」を描く狭斜小説が多いが、その「善悪は作者の技倆によりて定まるべく、人情だに至極せば、異常の恋必ずしも異常といふの故をもて咎めらるる理はなからん」と、狭斜での恋の倫理的善悪は、「作者の技倆」によって決まるとしている。

また、読者の度量も問われる。「娼妓を主人公としたるの故を以て、其小説を排斥する者は、没趣味没人情の鈍物のみ、高尚なる趣味を解すれば。主人公が娼妓であるか何であるかを忘れて同情する也」（東西南北生「落葉のはきよせ」国民之友、明治二九年九月二六日）――娼妓を描くだけで批判するのは「没趣味」で、「高尚なる趣味」を理解する読者であれば、主人公が娼妓であろうとなかろうと関係ないという。

三－三　小まとめ

狭斜小説を批判する側は、買売春は社会悪であり、芸娼妓は「醜業婦」であるという道義的、倫理的な観点から、芸娼妓を描いた狭斜小説を否定する。それに対して、狭斜小説を擁護する側は、芸娼妓は「醜業婦」であるが、その世界には「人間」や「個人」のドラマがあり、狭斜小説は彼女達に「同情」のまなざしを向けているという点に

重きを置いている。狭斜小説を擁護する側は、買売春という現実の位相から、フィクションとしての小説を切り離し、人間ドラマとして理想化している。また、芸娼妓＝「醜業婦」という蔑視を、「同情」という見方においてヒューマニスティックに乗り越えようとしているように見える。しかし、狭斜小説を肯定・擁護してゆく同時代評の言説を追ってゆくと、その言説上の表現には、芸娼妓蔑視の言葉がしばしば使用されている。例えば、次のような樋口一葉「にごりえ」の評価において顕著にみられるものである。

・「お力のみならず他の 自堕落女 のすべてが心根までも、之れを真摯なる方面より描き出して、人をして其の罪を忘れ其の情に同ぜしむ」（鄭洲「『文芸倶楽部』第九編」早稲田文学、明治二八年一〇月一〇日）

・「『濁江』の一篇は売春の女を主人公としたるもの、作者は此 厭悪すべき女性 に向つて、無量の同情をそゝぎ細かに其性情をうつし来る。」（田岡嶺雲「一葉女史の『にごりえ』」明治評論、明治二八年一二月一日）

・「『にごり江』は 売淫婦 を主人公として之が運命を描かんと試みしものなり（略）道徳屋諸先生は此売淫婦を論ずるに禽獣を見ると仝じ心をを以てす。（略） 売淫婦 は社会の犠牲となれる最も憫むべきもの、一なり。／『にごり江』の作者は此 売淫婦 に対して無量の同情を運ぶを惜しまざりし一事にて既に〳〵少からぬ感歎を受くるに足るべし」（魯庵生「一葉女史の『にごり江』（批評）」国民之友、明治二八年一〇月一九日）

これら評者たちのジレンマは、「にごりえ」という作品を評価したいのはやまやまだが、「にごりえ」のヒロインお力は、娼婦の中でも最下層の酌婦である、というところにある。結果、こうしたジレンマを乗り越えるために導き出したのが、「売淫婦」に「無量の同情」を寄せているところが「にごりえ」の評価点であるというのが、これらの同時代評に共通する論理であろう。

しかし、これらの同時代評は芸娼妓、私娼への「同情」は評価しつつも、一方では、四角で囲んだように、芸娼妓・私娼を「自堕落女」「厭悪すべき女性」「売淫婦」として明らかに認識している。そもそも批評家たちにとって芸娼妓は住む世界の位相が違うものとして認識されているからこそ、「同情」や「憐み」といったまなざしが向けられるのだとすると、「同情」＝ヒューマニティとして単純に受け止めることはできない。芸娼妓「同情」言説のなかにも、芸娼妓蔑視の考えが温存されているケースとして見た方がよいだろう。また、芸娼妓・私娼＝「醜業婦」という認識は温存したままで、そうした女性達に「同情」的な目を向ける作者の姿勢を賞賛することで、狭斜小説への批判を回避しているといえるかもしれない。

四　おわりに――芸娼妓を描くことはどう評価されたか？

これまで、日清戦争後に流行した悲惨小説の流れの中で、一八九五〔明治二八〕年ごろから芸娼妓・私娼を描いた小説が頻出するようになり、明治二九年の半ばには、それらを指す「狭斜小説」という名称が使用されはじめ、小説において、遊廓・花柳界、芸娼妓・私娼を描くことの是非が論じられるようになった経緯を見てきた。

とくに、狭斜小説を擁護・肯定する文壇においては、芸娼妓・私娼というのは「醜業婦」であるが、現実に差別・蔑視されている「醜業婦」を、小説においては「人間ドラマ」として「同情」的に描き出しているところに、狭斜小説の評価ポイントが置かれていた。しかし、こうしたロジックの中にも、芸娼妓を「醜業婦」として蔑視する視点が内在していることは先述したとおりであり、狭斜小説を擁護する側は、いかに現実の「醜業婦」の問題と、文学やフィクションにおける芸娼妓の問題を引き離すかに苦心していたことがうかがえる。

そうした苦慮の様子がわかる同時代評の一つが、広津柳浪「今戸心中」を評した「三人冗語　今戸心中」（めさまし草、明治二九年七月三一日）である。少し長いが該当部分を引用してみる。

「学者。此類の小説は始より少からぬ反対を招くべき性質を備へ居れり。いかにといふに美術に重きを置かざる道徳家、宗教家は勿論、美術を愛する人の中にても、今の教育を受けたるものは、西洋にてのかゝる筋の著述、即ち売婬婦の上を作りたる著述に対する非難を、その儘我国に移して、幾分か杓子定規の傾ある評をなすことを免れざるべく、（中略）されど試に今戸心中を取りて、近世の仏蘭西などに多く行はるゝ青楼（ボルデル、ロマアン）小説に比べ見ば其大に相殊なるところあるを知るに難からず。仏蘭西にてもかの椿姫の如く、情けを主にして作れるものなきにあらねど、例の自然派の青楼小説に至りては、概ね美き女の其心は獣に殊ならざるものを写せるなど、厭ふべきが多し。日本の今の娼妓と西洋の今の娼妓との間に、猶頗る相殊なるところあるは、日本の今の社会と西洋の今の社会との相殊なるがためにして、日本の批評家若し今戸心中を評すること、西洋の批評家の青楼小説を評するが如くならば、その評は妥当なること能はざるべし。（中略）唯〻近き世になりては、売婬婦は全く畜類に等きものに成り下りて、利欲の外に心なく、社会に敵視せらるゝと共におのれも社会を敵視し、常に社会といふ敵国より分捕品を獲むと心掛くるより外なきなり。日本にては売婬婦の風俗未だ西洋ほどに成り下らず。彼にて千何百年このかた決して分割すべからざるものとなり居れる貞操（トロイエ）即ち心の守りと身を汚さざること即ち身の守りとは、我にて猶相離れて成立つべきものなり（コイシュハイト）。実社会の景況既に此の如くなれば、その此の如きことの善悪は姑く置き、これを写して詩に入るゝことは至当なるべし。今戸心中を読むものは先づこの心を得て読むべきものなり。」

まず、狭斜小説には道徳家や、通、粋の基準で判断する近世的鑑賞家からの批判があることは、承知しているという。そして、作品を批評する前に、なぜか、日本の娼妓と西洋の娼妓の比較論を行う。西洋の娼婦は「獣」であるが、日本の娼妓は「未だ西洋ほどに成り下がってはいない。いや寧ろ、「貞操（トロイエ）即ち心の守りと身を汚さざること（コイシュハイト）即ち身の守りとは、我にて猶相離れて成立つべきものなり」、つまり日本の娼妓は「売春婦」であるが、「心の守り」と「身の守り」は別であり、このことを念頭において、「今戸心中」を読むようにと指示する。つまり、「今戸心中」は、娼妓＝売春婦がヒロインであるが、そこで問題にはるのは、「身」＝売春ではなく、「心」＝「詩情」の問題であるという。

近代文学において芸娼妓を描くのに、ここまで予防線を張らないといけなかったということは、現実における芸娼妓蔑視が強いことの査証ともなるであろうが、芸娼妓を「心」＝「詩情」の問題へと閉じ込めることは、現実での芸娼妓蔑視と云う問題を、文学は「同情」「詩情」によって回避し、置き去りにしているともいえるだろう。

また、今回は芸妓・娼妓・私娼（酌婦等）をひとくくりに扱ったが、それぞれを扱った作品、もしくは同時代評における温度差も注目しなければならないだろう。吉原の娼妓を描いた「今戸心中」で、「身」と「心」を分ける予防線が必要とされたとすると、売春女性の中で、当時最下層に置かれた「酌婦」を描いた樋口一葉「にごりえ」の場合、さらにその評価軸・評価方法は複雑となる。

樋口一葉の場合、「閨秀作家」という枠組みで評価されるバイアスがかかっている（女性なのに狭斜の巷を描くことの特異性が賛美される場合もある）もある。さらに、中山清美が論じるように、明治二八年の悲惨小説・観念小説の流行の中では、「にごりえ」は悲惨小説・観念小説のという範疇では取り扱われていなかったのに対して、明治二九年になると「社会の下層を舞台とせる」（「社会の下層」早稲田文学、明治二九年三月）の作品として一葉の「にごりえ」が代表格として引き合いにだされ、狭斜小説ブームの中で、「にごりえ」の再評価が行われた可能性もある。[3] 反対に、狭斜小説の議論そのものが「にごりえ」の成功とそれに追随する作品（「泥水清水」や「今戸心中」など）によって形成されている可能性もあることなども考えなければならない。また、明治二九年一一月の一葉死去以降、夭折の作家として一葉が神話化されること等の要素も鑑みないといけない。

今井泰子は「『にごりえ』に接した当時の人々がまず驚嘆したのは、かつて何びとも扱いえなかったその素材であった」と指摘する。[4]「素材」というのは「酌婦」のことである。近代文学史において、樋口一葉「にごりえ」に初めて「酌婦」が登場したかどうかは、検証が必要であるが、管見の範囲において、狭斜小説群のなかで「酌婦」を描いたものは少ない。遊廓の娼妓、花柳界の芸者よりもさらに低く見られていた「酌婦」を主人公にした「にごりえ」を評する場合も、芸娼妓への「同情」がポイントとなるのは先に見た通りである。しかし、いうまでもないが、同時代の評者たちが、「にごりえ」の作者は、芸娼

妓、私娼に「同情」している、と読み取っていること（「『にごり江』の作者は此売淫婦に対して無量の同情を運ぶを惜しまざりし一事にて既に〳〵少からぬ感歎を受くるに足るべし」魯庵生「一葉女史の『にごり江』」国民之友、明治二八年一〇月一九日）と、「にごりえ」というテクストに、芸娼妓、私娼への「同情」的な視線が内在しているかどうかは別の話である。後者は「にごりえ」というテクストを精緻に読み解かなければ結論がでない問題であり、「酌婦小説」としての「にごりえ」については、また別稿を要するだろう。

付記　本稿は、「東アジアの近代家族とセクシュアリティ　第一回公開研究会」（二〇一二年一二月二日、於：慶応義塾大学三田キャンパス）において発表した「〈花柳小説〉の需要と消費――明治二〇～三〇年代、〈芸娼妓〉が描かれた小説とセクシュアリティ」を基にしている。また、本研究は、科学研究費助成事業「基盤研究（C）生殖とセクシュアリティの近代――東アジアにおける「近代家族」とジェンダー」（課題番号24510390　研究代表：宮坂靖子、二〇一二～二〇一四年）の成果の一部である。

注

（1）佐伯順子『「色」と「愛」の比較文化史』岩波書店、一九九八〔平成一〇〕年一月、二二～二三頁

（2）「早稲田文学」の「文学界　小説と娼婦（彙報）」（明治二九年八月一五日）では、著者名と作品名のみの掲載であったので、出典を付して、発表順に並べ替えた。

（3）中山清美「明治二十八・九年の文壇状況――一葉の小説需要をめぐる問題」金城国文、七一号、一九九五〔平成七〕年三月

（4）今井泰子「『にごりえ』私解」『日本の近代文学　作家と作品』角川書店、一九七八〔昭和五三〕年一一月、二六頁